

ス。忠禮大ニ備レ、首事者ヲ殺シテ降ヲ納レ、先鋒ト爲リ、暴ヲ討シテ罪ヲ償フト請フ。是ヨリ先
 キ、幕府義勇ノ士、寛永寺ニ據リ、彰義隊ト稱ス。八郎、諸ラク「東西橋角、或ハ以テ志ヲ得ベキ也」
 ト。已ニシテ俄ニ官軍ノ勦滅スル所ト爲ル。八郎ノ部下、之ヲ聞テ逃竄相繼フ。八郎切齒シテ曰ク
 『怯夫、多シト雖モ、何チカ爲サシ、吾輩數十人ニシテ足レリ』ト。官軍ト大ニ山下ニ戰フ、衆寡敵
 セズ、死傷者皆盡シ。八郎、圍ヲ脱シテ三枚橋ニ至ル。忽チ見ル兵士七八人、旗ヲ水上ニ樹ツルヲ以
 テ我兵ト爲シ、近ケハ、則チ敵兵也。及チ揮ヒ、争ヒテ前ム。一人アリ、八郎ヲ撃テ其左腕ヲ断ツ。八
 郎屈セズ、大喝一聲、右手ヲ揮ヒ、斬テ之ヲ斃シケレバ敵、皆驚キ散ス。八郎、自ラ其創ヲ吮フ、血漉
 シリテ淋漓止マズ、我兵、後レテ至リ、扶ケテ之ヲ裏ミ、逃レテ兼海ニ至リ、覆本武揚ノ駕スル所ノ
 幡龍艦ニ入り、療スルヲ、數日ニシテ、稍ヤ瘡ユ。乃チ銃ヲ斷臂ニ托シ、右手ヲ以テ之ヲ放テ曰ク
 『右臂ニシテ在リ、猶一戰スベキ也』ト。八月、武揚、總督府ノ命シテ諸艦ヲ取ムルト聞キ、急ニ錨ヲ
 拔キ、北海ニ走ル。八郎、三加保艦ニ駕シ、之ニ從フ。洋中、颶風ニ遇ヒ、漂ヒテ銃子港ニ至ル。艦壞
 レ、死スル者數十人。八郎等、逃レテ下總ニ匿レ、居ルヲ數日。去テ友人ニ横濱ニ投ス。友人皆勸メ
 テ静岡ニ往キ、徳川氏ニ歸セシメントス。八郎、首ヲセズシテ曰ク『吾レ復官軍ヲ見ルヲ欲セズ』
 ト。遂ニ請テ外國船ニ駕シ、箱館ニ入り、武揚等ト合フ。官軍、箱館ヲ破ル。八郎、殊死力戰、銃丸ノ

傷ツク所ト爲ル。而カモ猶治スヘシ。八郎曰ク『吾レ終ニ官軍ト共ニ並立スルヲ能ハズ』ト。右臂ニ
 及チ執リ、自ラ其喉ヲ刺シテ死ス。時ニ年廿七。

八郎、元ト武伎ヲ以テ著ハル。而シテ學ヲ好ミ、長谷部是水軒ニ就テ、業ヲ受ク。天資剛邁、風姿偉爽、
 白眉長身、恂恂トシテ書生ノ如シ。

第四 近藤勇小傳

近藤勇、名ハ昌宣、小字ハ勝太、武州多摩郡石田村ノ人。父チ宮川久二ト曰フ、勇ハ、其第三子ナリ。
 文久三年春、將軍家茂、詔ヲ奉シテ京師ニ入ル。時ニ海内騷擾、西瀛、浮浪ヲ教唆シテ以テ幕府ヲ規
 フモノアリ。浮浪、動モスレバ險ニ投シテ以テ幸ヲ徵メント欲ス。議者、請ラシ、酒澤録用、或ハ借

内容見本 (62%縮小)

遊喧松下養殘癩。 滿案有書聊可娛。 誰知人間異男子。 支脚獨看地球圖。

第八 小松帶刀小傳

小松帶刀、名ハ清康、幼字ハ尙五郎、後帶刀ト改ム、鹿島顯岡ノ士也。帶刀、藩ニ仕ヘ、諸要職ヲ歴テ
 軍役掛ト爲ル。元治元年、七月、長人、禁閉ヲ犯ス、諸藩ノ兵、防禦甚タ苦ム、時ニ帶刀、京師ニ在リ、
 命ヲ奉リ、薩軍ヲ率ヒテ之ヲ討シ、斬獲スルヲ三十九人、遂ニ長軍ヲ敗ル。翌日、長軍、陸奥、天王寺
 ニ在リト聞キ、又之ヲ攻ム、至レバ、則チ已ニ逃レ去ル。因テ火ヲ放テ歸ル。九月、祿五百石ヲ賞加ス
 慶應二年丁卯十月、將軍慶喜公、特ニ帶刀及ヒ徳藤桑二郎ヲ徵シ、詢フニ天下ノ大計ヲ以テス、遂
 ニ二人ノ言ヲ嘉納シ、政權奉還ノ議ヲ決スト云フ。戊辰伏見ノ役、帶刀、薩ニ留マリ、足痛ニ罹リ、
 歩行スルヲ得ズ、病ヲ温泉ニ養フ、故ニ此戰ニ與ラザリキ。王政維新ノ際、京師ニ召サレテ參與ト
 爲リ、總裁局顧問ニ任シ、尋テ外國事務局判事ヲ兼ス。明治元年三月、從四位ニ叙シ、二年賞典録千
 石ヲ賜ハル。三年六月廿七日、病ミテ卒ス。

戊辰戰史

戊辰の役は、振古未曾有の大革命なり、政体は一變
 し、制度文物は一新し、社會の組織、人情好尚は一變
 せり、其風雲に際會して宮貴功名を成したるもの、
 其紛雜に擠せられて榮華勢利を失へるもの、或能管
 ならず、振古未曾有の大巾筆あつて而して後始めて
 之を悉すべし、世戊辰革命に關する史書乏しからざ
 るも、未だ能く之を悉せるものあらず、紫山氏少壯
 の才筆史家として今専ら力み茲に用ひ全部十二卷
 の大冊中に、此の大革命の事情を描きんぞす、戊辰
 改革の由て來る所、改革の成れる次第及今日あるを
 致せる所以等、明鏡を把て研鑽を照すが如くならん
 幸に江湖の愛讀を請ふ。

版藏館文博

本邦初の「戊辰全史」120年ぶりに初復刻！ 川崎紫山著

戊辰戰史

全三卷

マツノ書店



戊辰戦史卷六

北越戦闘(上)

紫山 川崎三郎 著

第一

東西兩軍ノ形勢。

上野ノ戦争、及ビ總野ノ戦争以來、東軍皆奥羽地方ニ走ル。奥羽ハ、東軍ノ根據ニシテ、其兵、慄悍驍勇、西南ノ勁敵ナリ。而シテ、戊辰戦争ノ活劇ハ、實ニ北越及ヒ奥羽ノ役ニ在リトス。

官軍ハ、薩長ノ兵、最トモ主力ヲ占メ、加州、尾州、土州、大垣、越前、高田、松代、松本等ノ諸藩兵、之ニ加ハリ、後ニ至リ、西國ノ諸藩、陸續トシテ兵ヲ出シ、總軍凡ソ十万人ニ至ル。砲ハ、各藩、多キハ十門ヨリ少ナキハ、數門ヲ備フ。然レモ、戰域ハ、北越、及ヒ奥羽ニ亘リ、兵數常ニ其不足ヲ告ゲ、又砲ノ如キハ、險阻ノ地形ナルヲ以テ、運搬ニ困難ナルヨリ、其從フモノハ、十二斤砲ノミ。

東軍ハ、會津藩、實ニ其主動者ニシテ、仙臺、米澤、庄内、南部、二本松、三春、棚倉等ノ二十餘藩、之ガ聯合ヲ爲シ、其總軍、六七万ニ至ル。砲ハ、諸藩皆數門ヲ有スレモ、概テ國境ノ諸要地ヲ分守スルヲ以

東西兩軍ノ形勢

一

東西兩軍ノ形勢

二

テ其比、甚タ少ナク、唯地形ト城寨トヲ以テ、之ヲ補フベキノミ。又其國境ノ外ニ出テ、守備ヲ爲スモノハ、仙臺、米澤、會津ノ兵ニシテ、最トモ精銳ナリトス。砲ハ、運搬ニ困難ナルヨリシテ、巨大ノモノナキハ、官軍ト異ナル無シ。

官軍ノ戰客ハ、首軍ハ、先ツ北陸ヲ畧取シ、繼テ其方嚮ヲ東ニ轉シテ以テ會津ニ突入セント欲シ、又別軍ハ、白河口ニ向ヒ、其勢至堂道ハ、一二ノ兵ヲ置テ、之ヲ監視セシメ、其他ハ、先ツ進ミテ白石ヲ占領シ、或ハ之ヲ占領セザルモ、敵ノ援路ヲ絶チ、轉シテ以テ會津ニ進撃セント欲シ、又一軍ヲ首軍ト別軍トノ中間ニ進メ、直ニ之ヲシテ會津ヲ擣カシメント欲シ、尙秋田、津輕ノ諸藩ヲシテ、飽クマテ歸順セシメ、以テ敵背ニ逼ラント欲スルニ在リ。蓋シ首軍、該方面ニ向ハ、敵情ヲ奪ヒ、別軍ヲシテ此間ニ乘シテ敵寨ヲ擣カシムベク、又此方面ハ、秋田、津輕ニ近キヲ以テ、或ハ之ト合スベク、又別軍、先ツ白石ヲ占領セハ、該地ハ、聯合軍ノ會盟地ナルヲ以テ、或ハ其聯合ヲ分離セシムベク、又中間ノ一軍ハ、敵兵ノ、我首軍ト別軍トヲ分離セント欲スル企圖ヲシテ、意ノ如クナラサラシムベク、而シテ秋田、津輕ノ諸藩、果シテ官軍ニ屬セバ、則チ敵ヲシテ後顧ノ患アラシメ、從テ其兵ヲシテ割カシムベシ。是レ官軍戰略ノ大体ニシテ、此計畫ヲ立テタル者ハ、官軍ノ兵術家、長州ノ俊傑、軍務局判事、大村益次郎其人ナリ。

『戊辰戦史』目次

第一巻

- 1 大政奉還の奏聞
- 2 米艦来航 外交の開始
- 3 水戸烈公及び東湖の対外政策
- 4 条約締結 堀田政略 井伊政略
- 5 尊王党主義の論旨
- 6 開国党主義の論旨
- 7 尊王派の運動及び其頓挫
- 8 桜田要撃

第二巻

- 1 公武合体論
- 2 寺田屋騒動
- 3 將軍の上洛 親征の中止
- 4 蛤御門の変
- 5 大和の乱
- 6 生麦事件 鹿兒島事変
- 7 筑波の乱
- 8 長征の役 再征の役
- 9 幕府の危機

付録：馬関の役

- (1) 長藩の戦備
- (2) 長軍、米艦を砲撃す
- (3) 長軍、仏艦を砲撃す
- (4) 長軍、蘭艦を砲撃す
- (5) 長軍、米艦を砲撃す
- (6) 長軍、仏艦を砲撃す
- (7) 英艦、長藩の砲撃を詰る
- (8) 同盟艦隊、長軍を撃つ

付録：防長の役

- (1) 幕府の戦備、及び長藩の戦備
- (2) 大島方面戦闘
- (3) 尾瀬川方面戦闘
- (4) 石見方面戦闘
- (5) 小倉方面戦闘

第二巻

- 1 薩長の聯合 討幕の密勅
- 2 長州処分に対する幕府の意嚮
- 3 王政復古の大号令

- 4 徳川慶喜の下坂
- 5 幕軍進発の状況
- 6 官軍の戦備
- 7 鳥羽方面戦闘
- 8 伏見方面戦闘
- 9 淀方面戦闘
- 10 橋本方面戦闘
- 11 幕軍敗退の状況
- 12 京都の事情、及び島津久光の事
- 13 伏見鳥羽戦闘の勝敗に於ける点評

付録：人物小伝

- 徳川慶喜、三條実美、伊庭
- 八郎、近藤勇、小原忠寛

第四巻

- 1 官軍の東征
- 2 慶喜公の恭順、官軍江戸城を領す
- 3 遠州の勤王
- 4 勝沼戦闘
- 5 上野戦闘
- 6 締盟各国と日本朝廷との関係

付録：人物小伝

- 勝義邦、大久保一翁、小松
- 帯刀、広沢真臣、竹内棟、土方歳三

第五巻

- 1 幕府の東走
- 2 宇都宮方面戦闘 流山の役
- 3 宇都宮方面戦闘 結城の役
- 4 宇都宮方面戦闘 安塚の役
- 5 船橋方面戦闘
- 6 日光方面戦闘 日光の進軍
- 7 日光方面戦闘 小佐越の進撃
- 8 日光方面戦闘 今市の前役
- 9 日光方面戦闘 今市の後役
- 10 大田原方面戦闘 板室の役
- 11 大田原方面戦闘 大田原の役
- 12 大田原方面戦闘 大田原の役
- 13 大田原方面戦闘 官軍の進撃
- 14 大田原方面戦闘 火王嶺の役及び関山の役

- 15 会津桑名両藩の方嚮
- 16 荘内米沢両藩の方嚮
- 17 秋田藩の勤王
- 18 仙台藩の方嚮

付録：人物小伝

- 小栗忠順、小栗道子、大村
- 永敏、山内容堂、植原六郎
- 左衛門

第六巻

- 1 東西両軍の形勢
- 2 北越諸藩の会同
- 3 長岡藩の方嚮
- 4 飯山及び小出島方面の戦闘
- 5 鯨波及び塚山方面の戦闘
- 6 榎嶺戦闘
- 7 長岡戦闘、長岡城の陥落
- 8 杉沢及び与板方面戦闘
- 9 今町方面戦闘
- 10 持立及び福島方面の戦闘
- 11 土谷方面に於る戦闘

付録：人物小伝

- 栗本鋤雲、岡本武雄

第七巻

- 1 総督の進征
- 2 長岡戦闘 東軍長岡恢復の戦略
- 3 長岡戦闘 東軍長岡城を恢復す
- 4 長岡戦闘 官軍再び長岡城を陥る
- 5 加茂三條方面に於る戦闘
- 6 衝背軍、新潟を略す
- 7 赤谷・金銅山・及津川方面戦闘
- 8 津川及陣峯方面戦闘
- 9 館原方面の戦闘
- 10 飯寺方面の戦闘、及市川党の敗退

付録：北越戦記別録

- 北越戦記(1)~(4)

第八巻

- 1 会津藩と奥羽列藩との関係
- 2 奥羽列藩の聯合

- 3 奥羽鎮撫使の挙動
- 4 白河戦闘 東軍白河城を陥る
- 5 白河戦闘 官軍白河城を復す
- 6 棚倉戦闘
- 7 海道官軍の進撃
- 8 平城戦闘
- 9 三春進入
- 10 二本松城の陥落

付録：人物小伝

- 山岡鉄舟、山本帯刀、三好
- 清房

付録：北越戦記別録

- 北越戦記(5)~(7)

第九巻

- 1 荘内藩の土風及び兵備
- 2 天童城の陥落
- 3 秋軍、荘内征討の形勢
- 4 官軍の防備
- 5 荘軍の進取 新莊城の陥落
- 6 荘軍、院内及び湯沢を占領す
- 7 横手城の陥落
- 8 角館の烈戦
- 9 三崎口方面の戦闘
- 10 長浜方面の戦闘
- 11 荘軍の退却

付録：人物小伝

- 中嶋源藏、目時隆之進

付録：秋田戦記別録

- 南部征討記(1)~(5)

第十巻

- 1 駒嶺の戦闘
- 2 官軍討会の戦略
- 3 会津口進撃 暮成嶺の烈戦
- 4 若松城下の烈戦
- 5 官軍の聯絡
- 6 城兵の戦力
- 7 城兵の力戦
- 8 城庫の火 寺内山・木曾口の進撃
- 9 城門の轟撃
- 10 城兵の克捷 高田の烈戦
- 11 城兵の堅守
- 12 東軍の帰順

別録：会津戦争逸聞

- (1) 烈女難に殉ず
- (2) 小児節に殉ず
- (3) 老人鐘を撞く
- (4) 白虎隊の義勇
- (5) 山川の剛勇
- (6) 一門の節烈
- (7) 河井の剛胆
- (8) 馬場の沈勇
- (9) 今井の苦節
- (10) 小笠原と大庭
- (11) 秋月の孤節
- (12) 広沢安任小伝
- (13) 松平容保小伝
- (14) 松平喜徳小伝
- (15) 婦女の操烈

第十一巻

- 1 荘内方面戦闘
- 2 荘内方面戦闘
- 3 荘内方面戦闘 荘内藩の降伏
- 4 米沢藩の降伏
- 5 仙台藩の降伏
- 6 津軽方面戦闘 盛岡兵の侵入
- 7 津軽方面戦闘 大館城の陥落
- 8 津軽方面戦闘 大館城の恢復
- 9 津軽方面戦闘 十二処口の激戦
- 10 津軽方面戦闘 盛岡藩の降伏

付録：人物小伝

- 河井繼之助、伊地知正治
- 吉田大八、近藤貞、三浦権
- 太夫、中島永胤

別録：平戸藩羽州征討日記

第十一巻

- 1 幕軍函館に入る
- 2 幕軍松前を陥る
- 3 幕軍江刺及び館を占領す
- 4 幕軍書を朝廷に上る
- 5 宮古の海戦
- 6 木古内・二股の烈戦
- 7 官軍松前を復す
- 8 函館の激戦(上)
- 9 函館の激戦(中)
- 10 函館の激戦(下) 官軍函館を回復す
- 11 官軍帰順を勧告す
- 12 幕軍の帰順
- 13 大鳥・人見・及び榎本

別録：詔勅

■文字とあり戊辰戦争の研究必携の書として以前から準備していた『戊辰戦史』が今回アンケートで予想通り抜群の第一位となり、よくよく皆様にお届けできようになりました。

■復刻に際しては次のような手を加えました。

- ①全頁の版面を原本より6%拡大するに代りて読み易さを更にアップさせた。
- ②全十一巻を上下二冊にまとめ、冒頭に見易い「総合目次」を付した。

③各巻の表紙を「色刷」にして目的の箇所を探し易くした。

④軽くスッキリさせるため巻末の広告を省いた。

■『同方会誌』『防長回天史』などと同じく「並製」ですが、丈夫でページ開きのよい独自の製本をおこなっています。良い本をよき安価に……と始めた、小社の「ニューマンタワー」。「身近に置いておきたい時すべし開けよ」と好評を頂いております。

■原本が入手不能だったせいか、百二十年も経つての本邦初復刻！この機会をお見逃しなまじり、今すぐ予約ください。

■体 裁全二巻 A5判並製1464頁
 ■定 価 一万八千円(税込・送料別)
 ■予約特価 一万五千円(税・送料別)
 ■特価締切 24年6月10日(厳守)
 ■発売開始 24年7月中旬
 ▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK
 山口県周南市銀座2-13
 ☎0834(0)395
マツノ書店
 URL <http://www.matuno.com>

(申し込みハガキにある二点セット特価をご利用下さい。)



膨大な史料に裏打ちされた 幕末維新史

幕末史研究者 西澤 朱実

戦記にして通史、各論にして総論——。川崎紫山の『戊辰戦史』をひとことで表現するなら、そうした言葉が浮かんで来ることだろう。

実際、戊辰戦争を表題に冠する同時代の書籍の多くは、藩や個人など従軍主体別に編まれ、詳細ではあるが地域的・時間的に限定された断片的な各論の印象が強かった。それらに對し本書では、慶応四年の鳥羽伏見から翌年の箱館まで各地で展開された戦闘を網羅しつつ、ペリー来航に遡り国内情勢の変化を丁寧に通ることで、戊辰戦争という近代日本の一大ターニングポイントが出来する必然性を「前史」である「幕末」の中に位置づけ、地域的・時間的に連続し重層した歴史を活写する。維新史への総括的アプローチが乏しい時代に、戊辰戦争のみならず、激動の一時代を實質一〇四〇ページ（付録を除く）に集約した才腕と先見性は刮目すべきだろう。表題からありがちな内容を連想すると、良い意味で裏切られる本である。

著者の川崎紫山は元治元年、水戸藩士川崎長蔵胤興の三男に生まれた。本名は三郎胤贊。旧藩校弘道館の伝統を継ぐ私塾「自強館」に学び、十七歳の頃上京して新聞記者となる。日本が東洋の盟主となり西列強に對峙すべしとするアジア主義者で、のち頭山満とともに明治三四年の黒竜会創設に参加。『世界百傑伝』や『訳註大日本史』の執筆、『西南記伝』『公爵山県有朋伝』『大日本憲政史』等の編纂員として知られ、昭和十八年に齡八十で没するまでに著書・編纂書合わせて五十点以上をものした健筆家である。

『戊辰戦争』は、紫山が三十歳の明治二六年十二月から翌年七月にかけ、全十二編の冊子形式で刊行された。一・二編が王政復古までの歴史的トピックをまとめた幕末史、第三編以降が戊辰戦争で、大小六十を超える戦闘が地域別・時系列に記録されている。

著者が水戸藩出身でアジア主義者でジャーナリスト——という、思想的にかなり偏ったイメージが先行しそうだが、本書は全編が膨大な量の史料に依拠しており、それ故に記述の正確さ・客観性が保たれていると言つてよいだろう。原文の引用も多く、たとえば「開国主義ノ論旨」の項では、該当する五三ページのうち、佐久間象山と横井小楠の開国論の引用にそれぞれ二二ページ・十八ページが費やされ、読み進めるのに苦勞するほどである。また天誅組の大和拳兵では「大和日記」、桜田事変の項では襲撃者の一人川蓮田市五郎が自訴後に事件の概要を認めた手紙といったように、当事者の手記を含む第一級史料がふんだんにちりばめられているのも本書の魅力である。

主題である戊辰戦争の各巻においては、『太政官日誌』所

収の戦報がほぼ網羅され、『復古記』の原史料でもある諸家の記録類と合わせて、それぞれの戦いの経過と帰結、死傷者・捕虜の氏名や時には分捕り品に至るまでが、簡潔かつ遺漏なく記されている。同時に本書は、限られた紙幅の中でも船橋戦争のような単発で知名度の低い戦闘を割愛せず、馬場三九郎・河井平吉ら諸藩士の活躍や、「実戦二臨ミタルコト甚ダ尠ナシト雖トモ」遠州報国隊を特記するなど、時代の画期となった内戦の全方位的な記録を試みる。さらに付録として収載された「北越戦記」（松代藩）・「南部征討記」（秋田藩）・「平戸藩羽州征討日記」と「会津戦争逸聞」の各工ピソード、幕末史を彩る二九人の小伝がそれぞれに本編を補い、戊辰戦争とその時代をより多面的・立体的に読み解く鍵を示唆している。

その全編を貫くのは水戸藩出身者としての視線と矜持であると言つてよいだろう。本書では旧幕軍を「東軍」と表記し、徳川慶喜には「公」の尊称を付す。將軍個人と合議政体としての「幕府」を明確に区別し、「幕府」の糊塗・姑息を痛烈に批判する筆勢は御三家たる水戸藩の立ち位置そのものである。一方で、同藩が時代を動かす思想的原点でありながら、元治の内訌で疲弊し遂に維新の表舞台に立つことがなかったように、紫山の視線もまた勝者・敗者のいずれでもなく、まして完全な第三者のそれでもない。が、当事者としての熱を湛えながら正か否かあるいは官か賊かに分極化しないその視線こそが、奢りと恩讐の束縛を超えて歴史と向き合い、断片化する維新史を集約へと転化し得た最大のツールであり、それにより生成された連続する時間の堆積を前にして初めて、変化する思想と行動の壮大な集束過程としての「維新」の全容を認識することが可能になったと言えるだろう。

なお、敢えて本書の難点を挙げるとすれば、内容が多岐にわたる分、当然ながらそれぞれの戦記本に比べて記述の簡略さが否めないことだろうか。読者の中には物足りなさを感じる向きもあるかもしれないが、むしろ常に戻るべき俯瞰の場所として、詳細な各論の中心に置いておきたい本のひとつである。

余談ながら、比較的客観的な記述に終始する著者が、庄内戦の冒頭では歴史好きの一個人に戻り、常勝軍を率いた大隊長川松平甚三郎と酒井吉之丞（玄蕃）、家老の松平権十郎を絶賛する様子が微笑ましい。勢い余って甚三郎と吉之丞の字を逆に記す筆の滑りはご愛敬である。それにしても、庄内戦を記した金字塔『戊辰庄内戦争録』の刊行が二九年であることを考えれば、果たして紫山の典拠は何であったのか……。また人物小伝では赤報隊の金原忠蔵が本名の「竹内棟（廉太郎）」で収録されており、人選の基準が気になるところである。そうした出典探しや謎解きも、本書を読む楽しみの一つかもしれない。

今回、『戊辰戦史』はマツノの復刻希望アンケートにおいて圧倒的な人気だったと聞く。震災の痛ましい記憶が未だ癒えぬ昨今、本書の復刻が細くとも一条の光をもたらしてくれることを心から祈る次第である。